

箭山紀行

「大池」を語る

里のくらしを守りつづける

山上に二個

の御池あり、

共に寒色一碧

深浅測る

べからず、

威霊あるが如く、

如何なる早魃

にても曾て

減水せしこと

なしと云ふ



ふるさと三光の誇り 八面山 大池（後方には豊前の山並み 英彦山、小屋岳、犬ヶ岳、経読岳、求菩提山）

下毛郡誌（昭和二年刊行）より

○編集・発行 三光周辺地域振興対策推進会議
「グローカルネット三光」
○連絡先 中津市三光支所内事務局 TEL 43・2050

かつて「豊前の国」といわれたこの地域は、溜池が多いことでも知られています。小さな川に沿って谷を登っていくと必ず一つや二つの池に出会うのです。この溜池こそは米作りにとって欠くことの出来ない水利施設です。

ところで、その貴重な「池」の一つがなんと標高五百餘の高さにのところにあります。そうです、八面山にある大池と小池です。

…今回は大池のお話です…

「大池」は、登山道を登って頂上部の稜線に沿って右手に見える美しい池です。この大池は、大宝元年（七〇一年）にはじめて築造されたといわれています（箭山神社の創建もこの年とされる）。はじめは谷の流れをせき止めた小さなものだった様ですが、次第に嵩上げされて大きくなっていきました。『大分県改良史』に記録されているだけでも大規模な補修工事が四回あり、その最初は、かの大友宗麟が豊前の国を平定した弘治三年（四四〇年前）とされています。

この大池にも実は悲しい歴史が…

今から八十年前の昭和六年（一九三二）。この年は春から雨が多く、梅雨に入ると毎日のように降り続いたそうです。特に七月には豪雨の日が何日も続き、里人のあいだでは「大

池の土手がくゆる（崩れる）かもしれん。」という話でもちきりでした。

そして七月二十一日未明、ついに大池の土手が決壊したのです。大音響とともに流出した大池の水は土石流となって金色川を一気に流れ下りました。崩れ落ちた岩石が火花を散らすほど激しくぶつかり合い（硝煙の臭いも）濁流となって谷をのみこんでしまいました。被災家屋二十数棟、田畑・山林被害は七十五軒、そして死者七名、重軽傷者多数という大惨事となってしまったのです。



濁流に押し流された金色川

しかし、地区の人たちの復興への取り組みは早く、翌昭和七年に山口村耕地整理組合を設立、農林大臣・県知事の認可を受けて復旧工事に着手しました。ただ山の頂上部に大規模な土手を改築するという工事は困難を極め二人の若者が犠牲になりました。こうして六年もの歳月を経て昭和十三年三月、池の土手は見事に完成。土地の人は大事業を団結してやり遂げたのです。



見るも無残な下田口地区の水田（後方右手は森山地区の丘）

現在の大池の土手の長さは百五十二段、堤の高さ十三・二段、池の広さは四・一六畝、貯水量三十三万ト。二十六畝の田んぼの水利を豊かにまかなっています。

米作りにかける思いを今も

現在の八面山水利組合理事長 上永明さんは、「箭山の頂上に、あれほどの池を造った先人たちの知恵と、命をかけて守ってきた水利、そしてこの米づくりに対する強い思いを、私たちは大事に守り続けたいと思っています。」と力強く語っていました。

※次号は、この大池にまつわる物語りのご紹介です。



大池のある八面山（箭山）を指差しながら思いを熱く語る上永明 理事長（辻の田の池のほとりにて）

『泥田からの一葉』

田植えの終わった三光佐知地区の田んぼからにぎやかな力エルの合唱が聞こえる。六月五日、この田んぼからは力エルさえも驚くほど大きな歓声が響いた。水を張った中に六面ものバレーコートが設けられ、西日本各地からだけでなく、インターナショナルチームまでもが参加して、熱戦をくり広げた。第二十三回泥田バレーボール大会、七十八チームの頂点をきわめたのは玖珠町から出場した「なしか」。唯一、二十三回連続のチームで、優勝は三年ぶり四回目だそうだ。表彰式に臨む彼らの姿は頭から爪先までまさに泥染め状態。なぜここまでハマるのか。なしか…。

全国に名を馳せたこの大会を主催している佐知地区の青壮年の集まり「竹馬会」。過疎だ、高齢化だ、少子化だと愚痴るよりも現実を受けとめ、足元を見つめて「ふるさとに何があるか、何をやるのか」の議論の末生み出した「泥田バレー」。継続こそ力だ。



天候のために霞んでよく見えないが、晴天時には後方に八面山（箭山）を望める